

2011年3月31日

法政大学総長 増田壽夫 様

DOCOMOMO Japan 代表

鈴木博之



### 法政大学55/58年館の保存・再生要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的の一つとする、世界54カ国が加盟している近代建築保存の日政府国際組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement: モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織) の日本支部です。

この度、法政大学では市ヶ谷キャンパス再編のため55/58年館の解体を検討中であると聞き及んでおります。

法政大学55/58年館は、大内兵衛総長と大江宏建築学科教授が戦後の混乱期の中、法政大学復興の礎となることを願い完成させた建物です。その二人の熱い思いが55/58年館には込められ、法政大学の歴史として長く受け継がれております。

また建築作品として、前面をガラスとスチールの黒いラインで構成するカーテンウォール、ピロティ、コンクリート打放し等の手法を駆使した戦後日本を代表するモダニズム建築で大江宏の代表作です。機能性と人間性への深い配慮、環境に対する的確な構想などが高く評価され日本建築学会作品賞を受賞し、その姿は、現在でも決して古びることなく、日本国内だけでなく世界に誇れる学校建築として、外濠の緑豊かな都市景観の一部を形成しています。

大内兵衛総長は1953年2月8日の『信濃毎日新聞』に「万古を照す真理の炬火」と題し次の様に書いております。

「たとえ、日本が、そして世界が、そのすべての人が道を失い野獣となり、第三次世界戦争にまきこまれるような暗黒の日が来ても、ここ千代田区の一城だけは、万古を照す真理の炬火をかかげておきたい。」

53年館は既に解体されてしまいましたが、今ここで55/58年館を解体することは、万古を照す真理の炬火を消し、法政大学の歴史を無にする事になります。55/58年館を解体ではなく再生し、真理の炬火に新しいエネルギーを加え、次の世代に継承することこそ、法政大学に必要なことと考えます。

解体の理由の一つとして耐震性の不足が指摘されておりますが、昨今の日本の耐震技術の進歩は目覚ましく、美観を損なうことなく耐震性を向上する手段が出来ております。また、IT化への対応や、快適な環境に生まれ変えた再生事例は数多くあります。総合設計制度等の手法も考えられます。

法政大学建築学科卒業した建築家や DOCOMOMO Japan には建物の保存活用の専門家もおりますので、大学内での議論ではなく、問題点を公開し55/58年館の価値を活かした再生に向けて広く知恵を集めることを提案させていただきます。

このかけがえのない建物を法政大学の歴史と周辺環境と共に後世へと継承されますよう、格別のご配慮をお願い申し上げます。

敬具